〈研究ノート・資料〉

孫育児に関わる祖父母の参加内容･参加意識に関する文献検討

白石悦子*1・井上玲子*2

Literature review on grandparents involved in child-rearing grandchildren of participation and involvement.

Etsuko SHIRAISHI *1 and Reiko INOUE *2

〈抄録〉

本研究は、祖父母に関する国内文献から祖父母研究の動向と、孫育児への参加内容・参加意識について明らかにし、祖父母を含めた多世代家族への看護のあり方を検討した。結果、孫育児への参加内容は、「孫の日常生活の支援」「親の生活支援」「親の情緒的支援」「孫の情緒的・社会性への支援」に分類され、2005年以降には日常的な家事支援・経済的支援・親の子育てを尊重する関わりを行っていた。孫育児の参加意識は「育児への関心」「親への支援」「祖父母自身の楽しみ」「親の育児を尊重し関わり続ける」「育児に戸惑う」「負担を感じる」であり、第二の子育てとして孫育児という役割への関心、親を支援したいというものであった。これらから、祖父母は親の生活支援、孫の日常生活の支援などを行っており、孫育児は楽しみでもあるが心身の負担にもなっていた。小児の看護では世代間の家族を考慮し関わることが重要だと考える。

Key words：祖父母、孫、育児参加、文献検討

Ⅰ．はじめに

わが国の総人口に占める高齢者人口の割合（高齢化率）は、2014年で26.0％となり過去最高となった（内閣府、2014）。ライフサイクルは大きく変化し、いわゆる祖父母である祖親期は50歳前後から始まり80歳過ぎまで30年間続くと考えられる（杉井、2003）。一方少子化、核家族化、家族の縮小化、共働き世帯の増加や地域のつながりの希薄化に伴い子育ての孤立化が進み、母親への負担は増加している。さらに、父親の育児参画の普及には課題が山積していることから、育児支援の担い手として祖父母の参加が期待されている（小松ほか、2010；樋口、2006）。近年では、祖父母への育児支援学級や講座を通した取り組みがなされ、効果の検証が行われている（石井ほか、2008）。

このように家族形成期の養育（小林、2010）や有業者の女性（小松ほか、2010）にとって祖父母はインフォーマル資源として重要とされ、特に祖母は、子育てだけでなく介護の担い手としても多重役割が期待される（樋口、2006）。家族形態や機能が変化し、孫育てに参加する祖父母の存在が重要視される中、祖父母の育児参加の内容を明らかにすることは、多世代家族の役割の変化が明確となる。わが国における祖父母の孫育児の変化と参加状況を明らかにすることは、これからの小児看護における多世代間の家族看護介入のエビデンスとなるものと考える。

Ⅱ．研究目的

祖父母の孫育児に関わる参加内容・参加意識と研究の現状を明らかにし、小児看護において祖父母も含めた家族への看護介入の示唆を得る。

Ⅲ．研究方法

1．研究対象文献の抽出

対象文献の抽出は、医学中央雑誌 Web（Vre.5）と

＊1　東海大学大学院健康科学研究科看護学専攻　（Tokai University Granduate School of Health Science Department of nursing）
＊2　東海大学健康科学部看護学科　（Department of Nursing, School of Health Sciences, Tokai University）

CiNii を使用し、「祖父」「祖母」「孫」のキーワードで抽出された会議録以外の全ての文献を、単独及びかけ合わせをした文献を対象とした。検索には期間を設定せず、2015年まですべての文献とした。なお論文中での孫の対象年齢はわが国の小児科対象年齢とされる15歳までとし、本文中に祖父母に関する記載がないものは除外した。

２．分析方法

文献の変遷は、文献数の年次ごとに、掲載誌名、筆頭者の所属、研究対象、研究方法で分類した。本研究では、育児とは「子どもを社会的・精神的に自立するまで養い育てること」と捉えることとし、抽出内容は、祖父母が直接・間接的に子どもに関わった事項を抽出した。また参加内容と参加意識は、文中から、祖父母の孫育児に参加する内容と、参加の意識に関する単語もしくは短文を、意味を損なわないように抽出した。祖父母の育児参加を示している単語や短文を抽出する際、自作の質問用紙の場合はそのまま項目を抽出した。単語・短文は類似性に基づいて分類し、それぞれ記事内容がわかるようタイトルをつけた。

Ⅳ．結果

１．対象文献の変遷（図１）

対象文献は1963年から2015年の間で139件の文献が抽出され、2008年、2011年・2012年・2014年は10件を超しているが、その他の年は６件前後に留まっていた。

２．雑誌の種類

文献が掲載された和雑誌の種類は、医療・栄養系９誌、看護系47誌、社会福祉・保育系９誌、教育・人文・社会・心理系が28誌の合計93誌で、看護系が最も多かった。

３．研究の種類

文献139件のうち原著論文は27件、総説・資料が８件、研究報告が74件、症例報告が９件、解説が21件であった。

４．筆頭者の所属機関の背景

筆頭者の背景・職種は、看護系の研究機関に属している者が51件、医療・行政機関に所属し、看護師・保健師・助産師等実務機関に属している者が39件であった。また、保育・教育系の研究機関に属している者が19件、保育・教育機関に所属し、実務機関に属する者が１件であった。さらに人文・社会学系の研究機関に属している者の文献が民間企業の研究室を含め10件、心理学系は研究機関に属している者が７件、その他国際関係学・経済学・栄養学・法学の研究機関に属している者が各１件ずつで計４件であった。福祉系の研究機関に属している者は３件、医療実務機関に所属している医師３件、薬剤師１件であった。また、当事者である祖父母の文献が１件であった。

５．掲載対象者と研究の主題

文献139件のうち解説21件を除く、原著論文、総説・資料、研究報告、症例報告の118件のうち、祖父母を主題に記述された文献は75件であり、他は祖父母以外の家族員が主題で文中に祖父母が記載されているのみであった。文献の対象は、75件中祖父母のみが32件、祖父母と父母両者は10件であった。残りの33件は、祖父母以外の家族員・医療職者を調査対象として祖父母に関する内容

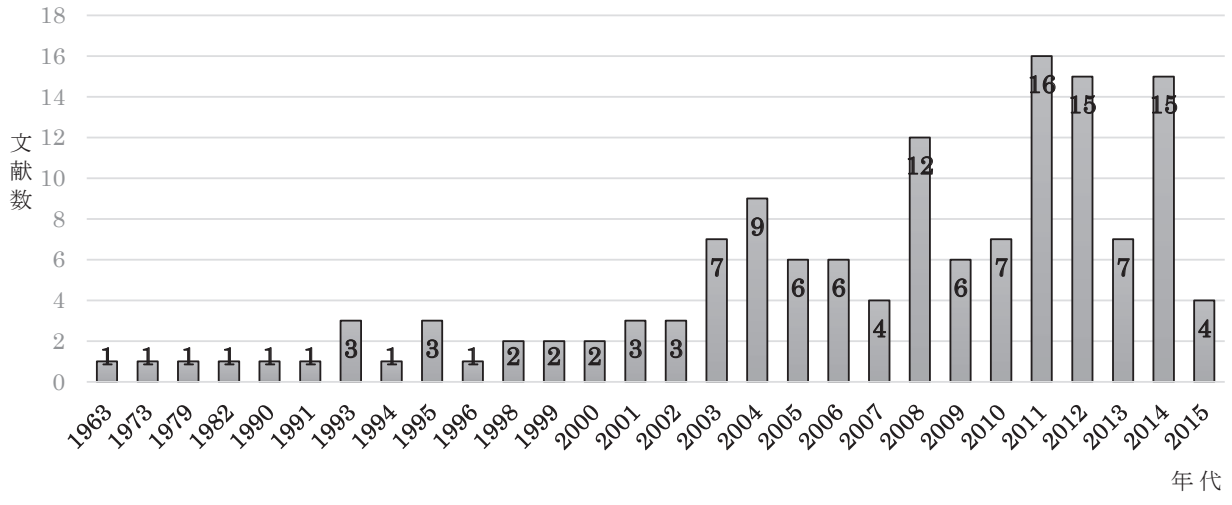
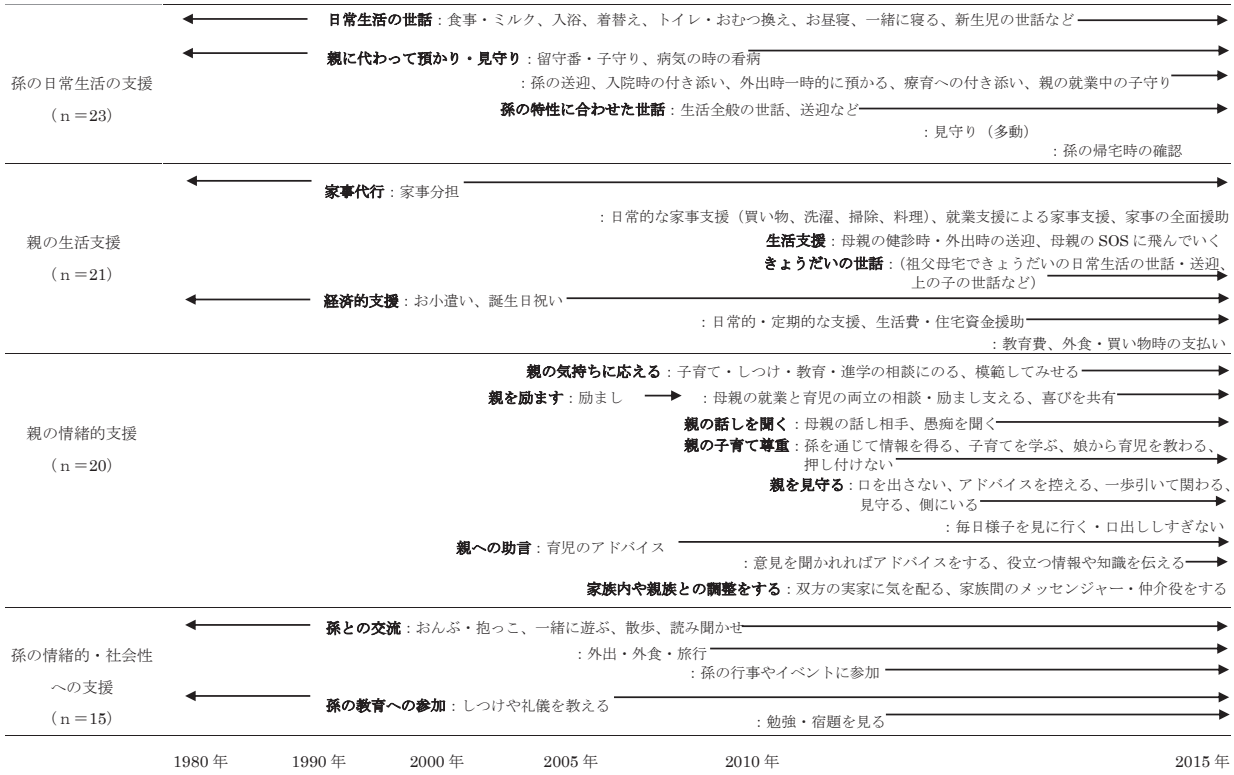


図１　対象文献の変遷

表１　祖父母の孫育児参加内容・参加意識に関する対象文献

n＝30

年	文献名
2015年	・小坂麻衣　他：初産婦である娘をもつ実母の産後１ヶ月間における祖母役割行動の行動調整．日本母性看護学会誌，15（1），10－17. ・那須川知子　他：世代間交流としての子育て支援に関する研究－祖父母世代の意識調査から－，兵庫教育大学研究紀要，47，11－18. ・今吉千尋 他：障碍のある子どもをもつ母親の育児不安に対する祖父母サポート機能に関する研究．久留米大学心理学研究紀要，14，1－6. ・曽山小織　他：祖母の子育てと孫育てに対する意識との関連．日本看護研究学会雑誌，38（1），139－150.
2014年	・石井邦子　他：育児上特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験．千葉看護学会会誌，20（1），3－10. ・高濱裕子　他：歩行開始期の子どもをもつ親世代と祖父母世代の世代性．お茶の水女子大学人文科学研究，10，155－166.
2013年	・丸山啓史：障害児の母親の就労と祖父母による援助．京都教育大学紀要，122，87－100. ・津間文子：祖母の担う「孫育て」が祖母自身に及ぼす影響－子ども世代に対する子育て支援－．母性衛生，53（4），573－582. ・井関敦子　他：里帰り分娩を行った娘に対する実母の支援姿勢と支援を通じて体験した思い．母性衛生，54（1），191－199.
2012年	・津間文子　他：母親的存在である祖母の「孫育て」の意味．インターナショナル Nursing Care Research，11（2），141－150.
2011年	・塚田桃代　他：母・娘世代間における育児意識の相違に対する効果的な支援について．奈良県母性衛生学会雑誌，24，36－39. ・久保恭子　他：祖母性の因子構造．母性衛生，51（4），601－608. ・岡津愛子　他：祖母の育児支援の実態－妊婦が望む育児支援との比較－．香川母性衛生学会誌，11（1），45－49. ・石井邦子　他：孫育児に参加する祖父母が持つ孫育児支援に対するニーズ．千葉看護学会会誌，16（2）．27－34. ・舟木由美子　他：在宅で溺水後遺症の孫を看る祖母の思い．中国四国地区国立病院・国立療養所看護研究学会誌，7，208－211.
2010年	・新道由記子：祖母と祖父の育児期支援の特性－祖父母に対するインタビュー調査から－．関西大学大学院人間科学社会学心理学研究，72，41－56. ・笹田ひとみ　他：孫育てに関する祖父母の思い．奈良県母性衛生学会雑誌，23，18－21. ・小林由希子：出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達．日本助産学会誌，24（1），28－39.
2008年	・久保恭子　他：わが国における祖母の育児支援－祖母性と祖母力－．母性衛生，49（2），303－311. ・北村安樹子：子育て世代のワークライフバランスと“祖父母力”．ライフデザインレポート，2008年5－6号，16－27 ・石井邦子　他：家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題．千葉看護学会会誌，14（1），107－114.
2005年	・宮中文子：出産・子育てを支える助産ケア－人と環境の視点から．日本助産学会誌，19（1），71－75.
2004年	・小野寺理佳：別居祖母に見る祖親性－グランドペアレンティング教育の現実的基盤に関わらせて－．北海道大学大学院教育学研究科紀要，95，119－141. ・小野寺理佳：別居祖母へのヒアリングデータにみる孫育ての悩みと求められる支援．季刊・社会保障研究，40（2），166－176.
2003年	・八重樫牧子　他：祖父母の子育て参加が母親の子育てに与える影響．川崎医療福祉学会誌，13（2），233－245. ・日出幸昌江　他：子育てにおける祖父母世代の参加－幼老共生の暮らしに向けての考察－．大阪教育大学紀要　第Ⅱ部門，51（2），139－152. ・今野和夫：通園施設における障害のある子どもの祖父母に対する支援．秋田大学教育文化部教育実践研究紀要，（25），39－52.
1998年	・今野和夫：障害児の祖父母についての研究－同居父方祖父母に対する母親の意識を中心に－．秋田大学教育学部研究紀要　教育科学，53，45－53.
1994年	・杉井潤子　他：祖父母・孫関係に関する研究－第３報－「孫育て」にみる祖父母の位置づけおよびその主観的評価－．大阪大学生活科学部紀要，42，141－153.
1982年	・今野和夫：子どもと老人－幼児教育における祖父母の役割．秋田大学教育学部研究紀要　教育科学，32，42－55.



（図に示した件数は延べ数である）

図２　祖父母の育児への参加内容とその変遷

を記した文献であった。75件の文献内容を研究目的別に分類すると、祖父母の孫育て・意識調査が12件、祖父母が行う支援内容が11件、他の家族からみる祖父母の役割や関係性が９件、他の家族から見る祖父母の支援内容が８件であった。次いで育児の世代間相違や影響分析が８件、祖父母面会の導入・評価等介入研究が７件、祖父母の役割と幸福感に関するものが５件であった。祖父母をキーパーソンとした症例報告が４件、孫支援講座・プログラムへのニーズが３件、親の祖父母への思い・家族以外から見る祖父母の支援実態に関すること・祖父母の障がい受容に関すること・祖母性に関することがそれぞれ２件ずつであった。

６．祖父母の孫育児の参加内容と参加意識

祖父母を主題とした文献75件のうち、祖父母が孫育児に参加する内容と参加意識が記述してある文献、合わせて30件をさらに分析した（表１）。

１）祖父母の孫育児への参加内容と変遷（図２）

孫育児への参加内容が示された文献は24件で、参加内容は「孫の日常生活の支援」「親の生活支援」「親の情緒的支援」「孫の情緒的・社会性への支援」の４つに分類した。以下の文献数は延べ数を示す。

「孫の日常生活の支援」は、23件の文献に記載されており、孫の日常生活の世話や孫の特性に合わせた世話や、孫の送迎や入院時の付き添いなどで親に代わって預かり・見守りあった。年代別変化をみると、2003年以降の親に代わって預かり・見守りにおいて、孫の送迎や孫の入院時の付き添いなどが示されるようになる。次に「親の生活支援」は、21件の文献に記載されており、家事分担や日常的な家事支援として家事代行、きょうだいの世話、生活支援として母親の健診時や外出時の送迎や教育・養育費や生活費などの支援であった。年代別変化は、2000年までは家事の分担が主だったが、2003年以降では日常的もしくは就業支援による家事支援がなされ、教育費・生活費・住宅資金援助等の日常的・定期的な費用の支援が示された。さらに、2010年以降では母親の送迎、孫のきょうだいの世話等で親の生活の支援をしていた。次に「親の情緒的支援」は、20件の文献に記載されており、相談にのることや未経験のことを模範して見せるなど親の気持ちに応えること、親を励ますことや親の話を聞くこと、アドバイスを控える、価値観を押し付けないなど親を見守り、親から育児を教わるなど親の子育てを尊重していくことであった。加えて意見を聞かれればアドバイスする、役立つ情報や知識を伝えるなどの親への

表２　祖父母の育児参加意識

タイトル	論文中に記載された参加意識内容
育児への関心（n＝13）	第二の子育て
	育児への関心がある
	自ら情報を得て関わる（親に聞く、育児書を読む、講座に参加）
	孫たちの心身の拠り所になる
	孫のために少々犠牲を払ってもよい
	孫の成長にプラスになる
	頼られたい・関わりたい
親への支援（n＝12）	子どもや孫の生活を支えたい
	母親の愚痴など話を聞くことが役割
	安心できるよう励ます、負担にならないよう情緒的安定させる
	協力して世話をする
	母親の就業継続に協力したい
	母親の就業継続に協力することが一種の社会参加
	子育てが大変そう・苦労を気遣う気持ち
	自分の育児を思い出し経験を生かして育児していく
	子育ては女の仕事
	孫の親が子育てを頼る先がない
	母親の様子を見守りたい
	親から頼られている
祖父母自身の楽しみ（n＝8）	生活の楽しみ・張りが出る
	生き甲斐というほどではないが楽しみの一つ
	親とは違う喜びを感じる
	励みになる
	孫が楽しければ自分も楽しい
	孫が可愛い
育児に戸惑う（n＝8）	昔との違いに戸惑う
	離乳食・紙おむつなどに戸惑う
親の育児を尊重し関わり続ける（n＝7）	責任は親という認識で相談相手になる
	母親が育児の主体であり祖母は口出しすべきでない
	親の考えを尊重しながら関わりたい
負担を感じる（n＝7）	加齢に伴う身体的負担がある
	加齢に伴う精神的負担がある

（表に示した文献数は延べ数である）

助言、双方の実家が良好な関係となるよう気を配る、母親の大変さをパートナーに伝えるなどの家族内や親族との調整役として親の情緒的支援をしていた。支援は2004年以降に多く、2005年には母親の就業と育児の両立を励ますこと、育児を祖父母が母親から学ぶことなどがなされ、2010年以降では口を出さない、一歩引いて関わるなど子育てを見守っていた。また「孫の情緒的・社会性への支援」の具体的内容は、15件の文献に記載されており、孫と一緒に遊ぶ、孫の行事やイベントに参加、孫の話し相手・相談相手になるなど孫との交流、しつけや礼儀を教える、勉強をみる等孫の教育への参加であった。孫との交流では可愛がる、一緒に遊ぶことに加え、2005年には外出や旅行、2008年以降には孫の行事やイベント参加が示されていた。勉強・宿題を見ることは2010年以降に示されるようになる。

２）祖父母の孫育児への参加意識（表２）

祖父母の孫育児への参加意識が示された文献は16件で、内容を分析した結果、参加意識は「祖父母自身の楽しみ」「親への支援」「育児への関心」「親の育児を尊重し関わり続ける」「育児に戸惑う」「負担を感じる」の６つに分類された。以下の文献数は延べ数を示す。

「育児への関心」は、13件の文献に記載されており、第二の子育てと捉えていること、頼られたい・関わりたい思い、孫の成長にプラスになる、現在の育児への関心などであった。「親への支援」は、12件の文献に記載されており、親や孫の生活を支えたい、安心できるよう負担にならないよう安定を図りたい、苦労を気遣う、母親の就業継続に協力したい、孫の親が子育てを頼れる先がないなどであった。また「祖父母自身の楽しみ」は、８件の文献に記載されており、生活の楽しみ・張りが出る、孫が可愛い、親とは違う喜びを感じるなどであった。一方で昔との違いに「育児に戸惑う」ことが８件の文献に記載され、「負担を感じる」ことが７件の文献に記載されており、身体的もしくは精神的負担を感じていた。し

かし、「親の考えを尊重しながら関わり続ける」は、７件の文献に記載されており、責任は親という認識で相談相手になる、母親が育児の主体であり口出しせず、親の考えを尊重しながら関わりたいことが示されていた。

Ⅳ．考察

１．祖父母研究の変遷と社会の流れ

祖父母に関する文献は1963年から始まり、2003年以降緩やかな増加がみられ、2008年以降に増加の傾向が伺えた。わが国ではバブル崩壊後の1990年前後から男女雇用機会均等法の制定、経済不況、その後の社会情勢なども影響し、女性の社会参加の高まりやライフコースの多様化など就業継続を望む女性が増えている（茂木、2007）。また近年の社会問題でもあるが、保育所不足による待機児童の増加がみられ、親世代だけで育児を継続することに困難が生じている（小林、2010）。近年の少子化対策として、保育所はかなり整備され運用も少し柔軟になってきているが、しかし今もフルタイムで働く女性たちにとって「祖母」が強力なよりどころ、究極のサポーターである事実は続いている（樋口、2006）。そして、団塊世代が60歳前後から75歳以上の高齢者となっていく2005年～2030年の間に増加することに伴い、本研究でも文献数の増加が示されていることから、祖父母の果たす役割の大きさに関心がむけられていると考えられる。また、子育ての相談相手として子育て経験者が支援者として求められていること、地域や家庭内に子育て経験者がいることは育児不安の軽減につながるともいわれており（田淵ほか、2007）、今後、多世代間の家族を念頭にした多彩な文献が増加することも考えられる。

掲載雑誌の種類や筆者の所属機関からみると、看護系が最も多かった。これは、看護領域においては保健師・助産師が特に育児に関わる機会が多いため文献数が多く、医師や薬剤師などは育児には直接関わる機会が少ないためこのような結果となっていると考える。看護の領域では、祖父母も含めた育児に関心をもって関わることの必要性を感じていることがわかる。

今回の抽出された祖父母に関する文献から、祖父母を研究対象としたものは半数以上を占めていた。内容は、孫育ての現状や思い、家族からみる祖父母の役割・関係性・支援内容、世代間の相違など孫の育児や療育を通しての関わりが多い。これらを年代からみると、支援内容や役割・関係性については1990年代から散見されるが、孫育ての現状や思いは2004年以降に見られ、支援内容についても2004年以降に増加している。また、世代間の相違については2011年以降の文献でみられた。かつてはマイナスイメージと共に社会から分離される傾向にあった高齢者だが、現在は心身共に健康な高齢者が増加し、積極的に社会参加するようになっており（田淵ほか、2006）、特に孫の育児に関わる重要性や参加の高まりを受けていると思われる。そのことが、近年の祖父母を対象とした調査につながったと考えられる。

一方、育児参加の中でも病児・障がい児の孫に関するものが2000年以降に報告され始め、面会や祖父母をキーパーソンとした実践報告が多い。社会の傾向からも障がい児の母親の就労は今後ますます高まると想定される。医療的ケアが必要な場合、障がいへの理解や支援が必要な場合、祖父母の存在は親にとって支援者となりうる重要な存在であると推察される。したがって今後は、育児に参加している祖父母も含めた支援や、退院後の生活を見据え、病児・障がい児を取り巻く家族の対象を拡大していくための研究が必要なのではないかと考える。

２．祖父母の孫育児への参加内容の変遷とその背景要因

育児に参加する祖父母の孫育児への参加内容の変遷では、2000年を境に様相が異なる。2000年以前の祖父母の孫育児の参加内容は、同居もしくは同居率が高い状況での調査で、生活の中で孫へのしつけや遊び、親世代への育児の伝承などが行われていた。そのため、育児の主体は親世代であっても、祖父母が生活の中で自然と家事や育児に参加し、孫との三世代の中でしつけや礼儀など孫の社会性に関わる支援などが行われていたと考える。しかし、2007年に女性の就業率は60％を超えて以降上昇傾向にある（総務省、2013）ことからも、祖父母が母親の就業支援への後押しとなっている可能性は高い。そのことにより、「孫の情緒的・社会性への支援」では、孫の勉強・宿題をみること、「孫の日常生活の支援」では孫の送迎、療育への付き添い、「親の生活支援」では家事の全面支援、きょうだいの世話をする等、親が不在時の支援へ変化してきていると考えられる。親の就業に伴う支援を行う祖父母の背景として、1970年～80年代の祖父母世代は、専業主婦率は最高となり、性別役割分業の規範が一般化され強化されていった（茂木、2007）。一方でオイルショック以後、経済の不安定から再就職の増加、女性の有業率が1980年代には半数を超えるまでになっており（茂木、2007）女性のライフコースが多様化してきた時代を生きてきている。そのため、女性の就業や経済変動などへの考え方に少なからず影響があるのではないかと考える。そのため、2005年前後から母親の就業に伴う支援の参加内容の増加があるものと考えられる。

また、現在の育児支援事業の中では公的支援の不足により、親世代は、私的資源としてインフォーマルな祖父母の支援を受けざるを得ないのではないかと考える。仕事と家事、育児の両立をしなければならない親にとって祖父母が「親の生活支援」をすることは、生活を維持していくためには重要な手段といえる。さらに2004年以降は、親世帯の生活費や住宅支援へと支援の幅は拡大し、1990年以降に続く経済不況の中、親をできるだけ支えたいという祖父母の思いが反映された結果ではないかと考える。その他、祖父母の「孫の日常生活を支援」、「親の生活支援」では、孫の一時的な預かりや送迎、親の送迎やSOSに飛んでいくことなどからも、近居での親への支援が行われている。三世代同居の低下、核家族の増加、経済的不安による共働きの増加、社会資源の不足などが反映され親が頼らざるを得ない現状などが影響しているものと考える。

その一方で、病気や障がいをもつ孫への祖父母に関する研究は、特に2010年以降にみられるようになっており、「孫の日常生活を支援」「親の生活支援」において、孫の特性に合わせた世話や見守り、きょうだいの世話などが行われている。病児・障がい児をもつ親世代は、障がい児の言動による生活の混乱や、子育てモデルがなく試行錯誤しなければならないこと、日常的に生じる心理的負担感や葛藤などの困難感を感じている（山下ほか、2013）。また、家族は障がいを理解してもらう難しさを感じ、説明方法を工夫し伝えることや、周囲の理解を期待し他者との調整をする体験をしている（吉野、2014）。そのため親は、生活を継続していくため家族間の協力や支援は重要（坂梨ほか、2013）で、特に祖父母の障がいへの理解が母親に影響するともいわれている。病児・障がい児の場合は、疾患や障がい特性に合わせた世話が重要であり、このような育児参加を可能とするのは、孫の疾患や障がいへの祖父母の理解や具体的な方法の習得が必要とされる。重度の障がいや疾患を抱えながら在宅療養を行うこと、社会情勢の変化などによって就業する女性が増えていることからも、今後病児や障がい児に関わる祖父母の研究が増加することが推定される。

高齢者は多くの場合、他者に幸福に本質的な理由で貢献することのみにエネルギーを注ごうとする（K.Warner Schair, Sherry L.Willis,2002）。祖父母は手段的や情緒的に親や孫に関わっているが、参加内容では「孫の日常生活を支援」することが文献から最も多く示されていることからも、孫を支援することは親への支援になるという思いが本質的にあるのではないかと考える。このような中から近年祖父母の関わり方は、価値観を押し付けず一歩引いて関わる、子育てを見守るなどに変化している。また、役割を遂行し仕事と孫の世話の両立をするために、自身の生活を調整している祖父母も文中に記載されており、祖父母なりに支援のあり方を模索していることが参加内容の変遷から推定される。必要な時は近居において支援を行いながらも、育児の主体は親であり親たちに任せサポート役に徹することで、親への手段的な支援と情緒的支援のバランスを取りながら育児に関わっているのではないかと考える。そのため、情緒的支援の変化は2008年以降に増加しているものとなっている。今後育児参加をしている現状や、関わり方を模索している祖父母の現状を踏まえると、小児看護においても祖父母を含めた支援は、今後一層重要なものとなると考える。

３．祖父母の孫育児への参加意識

祖父母の孫育児への参加意識は、「育児への関心」と「親への支援」がほぼ同等で上位を占めていることが明らかになった。近年の健康寿命の向上から祖父母たちは、定年を迎えた後も健康で生活できる年月が長くなり、自身が活動的に育児へ参加できる身体的・心理的環境が整っているといえる。また、孫のために少々犠牲を払ってもよい、頼られたいという意識には、発達課題でいう新しい役割のエネルギーの再方向づけの一つとして（Newman & Newman, 1984）、延長された健康寿命の中で、自身の役割を再構築することによって、生活の楽しみや励みを見出し、自身を価値づけることや喜び、満足感に繋がっていると考えられる。そのような新たな役割を見出し関わる前提には、「親の育児を尊重し関わり続ける」ことを意識しており、その意識の中には、母親が育児の主体であり祖母は口出すべきでない、親の考えを尊重しながら関わりたい、と意識していることが文献中に記載された参加意識内容からも示されており、親との役割の違いを認識しているものと推察される。祖母の支援満足度は、親の支援要請を満たすだけでなく三世代の関係性によること（小野寺、2003）とされる。「育児への関心」の中では、自身の楽しみを意識しながらも、親を支えたい・協力したい意識をもっており、「親の育児を尊重し関わり続ける」こととのバランスを取りながら、親との良好な関係を築いていくことで、孫育児への参加をしているのではないかと考える。一方、文献から祖父母は、育児参加意識の中で加齢に伴う「負担を感じ（る）」ていた。孫育児参加は、「祖父母自身の楽しみ」にもなるが、心身のストレスとなっていることを示しており、両価性があるといえる。また、小野寺（2003）は、祖母は子に頼らぬ自立した老後を送りたいと思っている

と報告している。親たちへの支援をしたいと思いながら、祖父母も自身の生活があり、充実させたい、迷惑をかけたくないという思いを持っており、支援による負担感や葛藤などが増加しないよう世代間の関係性を考慮すること、意思疎通が図られるよう関心をもって関わり続けることが重要なのではないかと考える。

４．今後の祖父母も含めた小児看護の展望

祖父母の孫への育児参加の実態を、文献より明らかにすることで、祖父母がさまざまな場面で育児に参加していることが明らかとなった。子育て期における祖父母の関与は親にとって重要な役割を果たしており、小児看護における祖父母への関わりが、親への支援となる可能性もある。今後小児看護の中で、家族支援を行う対象者の幅を広げ、祖父母も見据えていくことが必要なのではないかと考える。

文献

樋口恵子（2006）：祖母力 第２刷、親水社、pp.30-42.pp.145-163.

バーバラ M.Newman，フィリップ R.Newman（1984）：Development Through Life、福富譲（1995）新版 生涯発達心理学、川島書店、pp.452-467.

石井邦子、井出成美、佐藤紀子（2008）：家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題、千葉看護学会会誌、14（1）、107-114.

小林由希子（2010）：出産前後の里帰りにおける実母の援助と母子関係・母性性の発達、日本助産学会誌、24（1）、28-39.

小松紗代子、斎藤民、甲斐一郎（2010）：孫の育児に参加する祖父母の精神的健康に関する文献的考察、日本公衆衛生誌、57（11）、1005-1014.

K.Warner Schair，Sherry L.Willis（2002）／岡林秀樹（2005）、成人発達とエイジング、ブレーン出版、pp.134-144

茂木利子（2007）：子育て支援のあり方に関する一考察～主にジェンダーの視点に基づいて～、宇都宮大学生涯学習教育研究センター研究報告、13、65-82.

内閣府，平成27年高齢社会白書（2014）：平成26年度 高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況、高齢化の現状と将来像、平成28年２月12日アクセス．http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2015/zenbun/27pdf_index.html

小野寺理佳（2003）：別居祖母の育児支援満足度とめぐる一考察、家族社会学研究、14（2）、77-87.

坂梨左織、大池美也子（2013）：口唇形成術を受けた子どもの母親の経験、家族看護学研究、19（1）、23-39.

総務省統計局（2013）：労働力調査ミニトピックス No. 8、平成28年10月30日アクセス．http://www.stat.go.jp/data/roudou/tsushin/pdf/no08.pdf

杉井潤子（2003）：現代における祖父母と孫との関係性―祖父母の加齢と孫の成長による変化と連続性、平成13年度～平成14年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書、1-136.

田淵恵、中原純（2006）：祖父母世代による子育て参加の可能性の検討、生老病死の行動科学、11、53-62.

田淵恵、中原純（2007）：祖父母世代における子育て意欲と支援への問題意識、生老病死の行動科学、12、13-22.

山下亜紀子、河野次郎（2013）：発達障害児の母親が抱える生活困難についての研究、日本社会精神医学会雑誌、22（3）、241-254.

吉野妙子（2014）：発達障害をもつ母親の育児上の体験、小児保健研究、73（2）、293-299.